

ポストベラム期の南部社会における教育の普及 —人種・ジェンダー・階級の視点からみたジョージア州の教育—

谷中寿子

はじめにかえて

教育とは国家やある特定地域の体制を反映するものである。誰に、何を目的として、どのような内容の教育を施すか、この問いかけはいつの時代にも、どのような社会においても重要なことである。しかし、南北戦争後のアメリカ南部においては、この問題は南部社会のその後のあり方を決定する最重要課題であった。南部人は建国以来、奴隷制度に基づく南部的生活様式を享受していたので、人種、ジェンダー、階級に基づく南部特有のヒエラルキーが確立していた。アメリカ合衆国から脱退し新たに南部連合国を樹立して戦った南部11州は惨敗し、壊滅状態の中から政治的、経済的、社会的にまったく異なった体制を強いる北部共和党の支配下で再建に臨まねばならなかった。1865年の降伏により、奴隷制度は廃止され、プランテーションを中心とする農本主義が瓦解し、南部白人男性の優位性は危機に陥った。このような状況のなかで、南部社会は新たな教育制度を発足させねばならなかった。

本題に入る前に、南北戦争前のアンティベラム期の南部における教育について少し触れておく。アメリカ合衆国の教育を論ずる研究は、公教育が比較的早い時期の植民地時代から発展していた北東部や中西部を対象にしたものが多い¹。女子教育についても、19世紀前半の改革運動や女権運動の発祥の地であるニューイングランドにおける女子アカデミーや教員養成を目的として設立された女子セミナリーの研究が中心となっていた²。南部はもともと公教育を普及させようという姿勢に欠けていた地域であり、公立の教育制度の発展は遅れていた。教育は個人の資力に委ねられており、一部の富裕な特権階級は子弟の教育を家庭教師に委ねたり、男児を外国に留学させたりしていた。この階級の女子教育は南部社会の白人優越思想に基づいて、女性の男性依存や家庭内の役割を強調し、上品なマナーと行動、信仰心、清潔感を兼ね備えた「サザンベル (Southern Bell)」の育成が目的であった³。さらに1830年代末になると、これら富裕階級の南部女性に高等教育を提供する私立女子大学も創設され、女子教育に関しては北東部の女子大学に匹敵するような内容の教育が行われていた⁴。ところが、南部の自作農 (yeomen) の子弟は日々の生活のための労働に追われ、耕作や収穫、家畜の世話の仕方を仕込まれる他は、母親や姉妹から読み書

きを教えられる程度の教育しか受けていなかった。黒人に関しては、1800年から1835年の間に、南部のほとんどの州が黒人奴隷に読み書きを教えることを禁止する法令を制定していた⁵。

以上のように19世紀前半の南部では、公教育制度が十分に整っていなかったのだが、南北戦争後のポストベラム期に、どのような教育が開始されたのだろうか。ここで留意しなければならない幾つかの問題がある。ひとつには、奴隷制度が廃止されたとはいえ、解放された約400万人の元奴隷に対する白人の対応、しかも貧富の差に関係なくすべての白人が抱く人種観を考慮しなければならない。二つ目は、アンティベラム期から根付いている南部白人女性「サザンベル」の神聖不可侵のごとき地位、それは南部の白人優位性を象徴していたことである。このような旧南部人の人種観や女性観、男女の関係についての考え方、裕福なエリート層の意識、社会習慣などが南部連合国の敗北によって、どのように変化したのだろうか。古き南部人としての意識は教育においてどのような影響力を持ち続けたのであろうか。本稿は、新南部が形成される過程において、顕著な南部の特質を有する地域、しかも筆者の長年の研究対象地域でもあるジョージア州の教育に焦点を合わせ、近年の先行研究を踏まえた上で、社会と教育の連関を分析するためのさまざまな史料の有効性を提示し、問題点を明らかにするものである。現在、調査中の「19世紀後半から20世紀初頭にかけてのジョージア州の女子高等教育」の研究の一里塚として、女子教育に注目しつつ、ポストベラム期から世紀転換期に至るジョージア州の教育に関する史料を検討する。

南部における再建期の教育

再建期の教育を論ずるときに、南部社会にとって最優先課題は、無産の労働者として南部に留まざるを得なかった読み書きのできない解放黒人の生活の基盤作りであり、教育であった。彼らは「40エーカーの土地と一頭のラバ」の支給を期待したが、南部白人の土地を没収して黒人に払い下げる案は見送られた。没落した南部白人による黒人教育は望むべくもないことだった。そこで、南部をアメリカ合衆国に引き戻すための再建政策の一環として、連邦政府は「避難民、解放民および放棄された土地に関する局」(the Bureau of Refugees, Freedmen, and Abandoned Lands, 一般には「解放民局」"Freedmen's Bureau"と称されている)を1865年3月に設立し、雇用、衣食住、教育、法的助力など、解放黒人の生活に対する支援と救済を担った。ジョージア州の解放黒人の教育に関しても、解放民局が学校設立のための助言、保護、財政的援助を行った。

その間の記録が「ジョージア州教育長の記録」("Records of the Superintendent of Education for the State of Georgia", 28 reels)、「ジョージア州副局長の記録」("Records of the Assistant Commissioner for the State of Georgia", 36 reels)としてアメリカ国立公文書

館に保存され、マイクロフィルムで閲覧できる。この二つの「記録」の中には、歴代のジョージア州解放民局教育長のギルバート・イバハート (Gilbert L. Eberhart)、エドモンド・ウェア (Edmund A. Ware)、ジョン・ルイス (John R. Lewis) や解放民局局长オリヴァー・オーティス・ハワード (Oliver Otis Howard)、副局长デイヴィス・ティルソン (Davis Tillson)、および各学校に派遣された視察官の手紙、さらに、各学校からの報告書、先生達からの報告書、そして、これらの事業に対する議会での予算案、実際にかかった経費などの史料が残されている。

これらの史料を分析することにより、解放民局の役割とその限界が判明する。もともと教育はアメリカ合衆国では連邦政府の管轄ではなく、州政府や地方の教育委員会の管理下に置かれている。南部連合国の崩壊という非常時ゆえに、連邦政府が解放黒人の教育に乗り出したのだが、決して、解放民局が全責任を負うという姿勢ではない。学校設立のための資金をどのような組織から援助してもらうか、教員のサラリーをいかに確保するか、など解放民局は取り纏め役の役割を担っていたといえる。北部の宗教団体やさまざまな慈善団体などに財政的援助や教師の派遣を要請する手紙が多く残されている⁶。

さらに、解放民局が、教育を受ける黒人自身に対してどのような姿勢で臨んだのであろうか。解放民局は、解放黒人が勤勉な労働により収入を確保し、自立した生活を送り、その収入で自分たちの学校を維持できるように仕向けたかった。例えば、ジョージア州解放民局でただ一人の黒人職員のウィリアム・ホワイト (William J. White) から教育局長イバハートに宛てた手紙には、解放黒人に自助努力の大切さを納得させる努力を行っていることが記されている⁷。

教育長はジョージア州の各地に赴任した教員の動向や、周囲の南部白人が黒人教育にどのような反応を示しているのか、などの情報を収集し、ワシントン DC にある解放民局の本部にその報告書を送っている。この報告書を精査すれば、南部白人の黒人に対する人種観や奴隷制度を失った後にどのような南部社会を構築しようとしていたのかなどが、分析できるであろう。北部から派遣された教師に宿舍を貸すのを拒否したり、教員や黒人生徒に危害を加えたりする南部白人も少なくなかったようである⁸。憲法修正 14 条で成年男子すべての市民権は保障されたが、解放黒人が学校教育を受け、白人と対等になることは、南部白人にとって許し難いことであり、白人優越性は南北戦争後も南部人にとって譲ることのできない信念であった。

北部教師と南部教育

北部からの南部にやってきた教師のほとんどが、宗教上の使命感を抱いて解放黒人の教育に携わった。解放民局に協力して教師を派遣した主な宗教団体は、アメリカ宣教師協会 (American Missionary Association)、メソジスト監督教会 (Methodist Episcopal Church)、

アメリカバプティスト国内宣教師協会 (American Baptist Home Missionary Society) であった。これら北部からの教師に関して 20 世紀に入ってすぐにデュ・ボイス (W. E. B. Du Bois) が言及している⁹。さらに、40 年後の第 2 次世界大戦直前に南部白人の屈折した精神構造を分析し、アンティベラム期から続く南部の神話を解体しようとしたウィルバー・J. キャッシュ (W. J. Cash) も、「北部の金と北部人教師」 (“Yankee money and Yankee teachers”) に教育される解放黒人について叙述している¹⁰。1960 年代からの公民権運動の台頭に伴って、上記の団体が保存している宗教活動の詳細な記録や機関誌に基づいて¹¹、解放黒人についての実証的な研究も数多く出版され始め、北部からやってきた男女の教師について綿密な分析が進められた¹²。さらに、赴任先で記していた教師の日記や手紙が子孫によって発見され、近年、編集されて出版される例もある¹³。

北部からの教師が南部社会に及ぼした影響に関しては、それぞれの研究者によって解釈がまったく異なる。例えば、彼ら (彼女たち) の献身的な働きを称えたデュ・ボイスと単に反感と嫌悪を生じさせたお節介者と評したキャッシュでは、北部教師に対して全く正反対の評価を下してはいるが、ニューイングランド人による「ヤンキー魂」が南部人に与えた衝撃は計り知れないものとの見解では、両者は一致している¹⁴。これら教員の態度に人種的な温情主義、あるいは母性的な性格、文化的帝国主義的な押しつけがましさを見いだす研究者もいる¹⁵。故郷では身近に黒人に接したことがない北部教員が派遣され、南部に来てから初めて解放黒人を教育することになり、戸惑いを感じることも多々あったのであろう。情熱的な理想ばかりでは解決できない問題に遭遇し、数年で帰郷した教員も多く、日記や手紙には、必ずしも白人と黒人の平等を信じておらず、明らかに人種偏見に満ちた内容が読み取れるものもある¹⁶。

これまで述べてきた再建時代のジョージア州の教育は、連邦政府主導の北部人教師による、主に解放黒人を対象にした教育である。それでは、南部白人に対するポストベラム期の教育はどうなっていたのであろうか。前述したように、アンティベラム期においては、公教育は否定され、予算は計上されなかったため、そもそも貧しい階層の南部白人に対する教育はお粗末なものであった。戦前に創設された富裕階級の子弟のための私立の高等教育施設は南北戦争によって破壊されてしまった。つまり、南北戦争後の南部白人のための教育は存在していないに等しかった。従って、ジョージア州における公教育についての史料や研究書は 1872 年に公立学校制度が確立した後の時代に関するものである。しかも、1877 年制定のジョージア州憲法では、小学校レベルの公立学校の設立は許可されたが、教育のために十分な税金を充てることに配慮せず、中学校レベルの教育は奨励されなかった。このような状況であったため、ジョージア州では、財政的に税収入の豊富なおく一部の都市部を除いて、1920 年代半ばになってからやっと州立高校が貧しい郡も含めて各地に点在するようになったのだ¹⁷。

19 世紀後半、北部経済の落ち込みや政治家と実業家の腐敗などが相俟って、北部共和

党による南部の再建に対する熱意がじょじょに薄れるにつれて、解放黒人の地位や処遇は南部人に委ねられ始めた。特赦によって公職追放から復帰した旧南部白人指導者が牛耳る民主党勢力も復権し始めた。解放民局における教育関係の職務も1870年には終了し、黒人の教育は勿論のこと、あらゆる社会生活において、黒人を差別、隔離するジム・クロー制度が確立していった。よって、この時期のジョージア州では、公教育は白人にとっても黒人にとっても十分なものではなかった。

19世紀末の南部女性の高等教育

ジョージア州における教育制度の遅れ、特に農村部や貧しい地域における教育の欠如は、ジョージア州民の識字率の低さに如実に表れていた。世紀転換期、30パーセント以上の州民が読み書きができず、10歳から14歳の子どもの非識字率は22パーセント以上であった(全米のこの年齢の子どもの非識字率は7パーセント)¹⁸。19世紀後半の南部が経済的、社会的に発展するためには、工業化を促進し、農村の貧困状態を改善する必要があった。そのためには、教育を普及させ、新南部の社会建設の要求に適う人材を育成することが第一条件である。教育の向上には大量の教員を都市部のみならず、農村地帯にも送り込み、公教育の普及、しかも小学校レベルではなく、中学・高校レベルまで教育程度を高め、そして職業訓練など教育範囲を拡げなければならなかった。このように南部全域において教育の必要性が高まり、南部諸州に教員養成のための学校(normal school)が次々に設立された。ジョージア州においても、1907年の段階で、4つの公立の教員養成学校が存在した¹⁹。これらの教員養成学校の大多数の生徒は女性であった。その理由は南北戦争中、多数の男性が死傷し、家庭が崩壊したため、経済的困窮に陥った中産階級の白人女性にとって、南部女性としての世間体と地位を貶めることなく働ける職種は、学校の教員であったためである。

このように教員養成のための学校は設立され始めたが、南部では、特にジョージア州では、女性に高等教育を提供することを拒み続けた。ジョージア州立大学において、教員養成と実業のための課程のみ共学になったのは1889年であり、同大学の学部課程に女性が入学を許されたのは1918年である。しかし、その時も、女性が履修できるクラスは教育と家政学のプログラムだけであった²⁰。何故、ジョージア州を含めて南部では、このように女子高等教育の普及が遅れたのであろうか。まさにこの女子高等教育に対する南部社会の姿勢の中に、現在調査中の研究テーマであるポストベラム期から19世紀後半、世紀転換期、20世紀半ばに至るまでの南部社会と教育の相互関係が端的に見いだされるのである。それは、南北戦争後も富裕の白人男性をトップとして、白人女性、貧乏白人、黒人男女から編成される歴然たるヒエラルキーが南部社会には残存していたことと関係する。このヒエラルキーは階級、ジェンダー、人種の要因に基づいて構成され、ジム・クロー制、

家父長制、「失われた大義」への神話など、南部をアメリカ合衆国のなかでも特異な存在とあらしめる様々な現象と関わっている²¹。

このポストベラム期の南部社会の人種関係、男女関係、階級の差をあぶり出すために、19世紀後半に設立された2つの私立女子高等教育機関における教育を取り上げることは有効な手段と考える。公立の女子高等教育機関の欠如と男女共学化の遅れに比べて、宗教団体による私立の女子高等教育は19世紀後半に始まっていた。ジョージア州アトランタに創設されたスペルマン大学 (Spelman College)²² とアグネス・スコット大学 (Agnes Scott College) の創設から発展の過程、教育方針、カリキュラムの内容、教授陣、学校生活、学生の卒業後の進路などさまざまな問題に焦点を当てて分析すると、教育に反映された南部社会の特質が明らかになるであろう。

この研究テーマのために収集した第一次資料の検討をしておきたい。第一のケーススタディとして、黒人女子高等教育を目標として、北部の宗教団体と女性教員によって設立されたスペルマン大学に関する史料を見てみよう。この学校は1880年、アトランタ・バプティスト女性セミナリー (Atlanta Baptist Female Seminary) として、僅か11人の元奴隷に読み書きと聖書購読を教えるために創設された。その後、毎年、『カタログ』 (School Catalogue) を発行している。最初は数ページのパンフレットに過ぎず、ボストンのバプティスト国内宣教師協会が2人の女性、ソフィア・B. パッカード (Sophia B. Packard) とハリエット・E. ジャイルズ (Harriet E. Giles) を派遣した経緯、学校設立の主旨、提供するプログラム、15歳以上で道徳的な人格 (good moral character) を有するという入学資格、費用、在校生の名前と出身地などが記されている。このカタログから、在籍する生徒数や北部からやってくる教員数が年々増加し、学校が発展する様や、ジョン・ロックフェラー (John D. Rockefeller) 一族からの寄付金によって校舎・寮が次々に増設される模様、カリキュラムもじょじょに充実していく過程、そして特に、当時の南部においてどのような黒人女性が必要とされていたのか、などさまざまなことが読み取れる。当初の一般教養教育と宗教教育を重視した北東部で行われていた女子教育をそのまま持ち込もうとした創立者の意図にもかかわらず、経済的自立や家計を支えるための職業訓練を黒人女性には提供しなければならない現実をカタログは語っている。さらに、日常生活における女性としての躰や自由人として衣食住の基本を身につけさせるための寮生活における厳しい規則を生徒に伝えることもカタログの主な目的である。

カタログの他にスペルマン大学の古文書館に残されている貴重な資料は、1884年以降、毎年刊行されている校内誌『メッセンジャー』 (Messenger) である。この雑誌は、職業訓練の一環として、文章作成法やタイプ印刷術を学生たちに教えるために校内に設置された印刷所で発行されたものである。『メッセンジャー』は学生向けの校内誌ではあったが、学外の情勢についての情報も多い。ジム・クロウ制度下の南部社会において、州都であるアトランタでも黒人雑誌の発行は少なく、一般の黒人たちが黒人コミュニティの情報を白人

発行の新聞や雑誌からはほとんど得ることはできなかった。それゆえ、『メッセンジャー』は黒人コミュニティにおける情報誌の役割を担っていた。『メッセンジャー』を丹念に分析することにより、白人によって隔離、差別されていた黒人コミュニティにおいて、黒人大学を中心にして黒人の意識を文化的、社会的に向上させようとする学校関係者の意気込みが伝わってくるだろう。

その他、スペルマン大学の歴代学長の著書²³や手紙、関係者の様々な文書は、それぞれの時期の白人教授陣、経営陣、黒人学生の意識や黒人コミュニティを取り巻く状況を探るのに最適な資料である。例えば、理事会から北部の資金援助組織や宗教団体、慈善家に送られた書簡、報告書などから、いかに黒人大学が南部において資金を調達することが難しかったか、経済的に余裕のない黒人家庭出身の学生が多く、勉学を続けることがどれだけ大変なことか、入学する学生の学力が高等教育には到底達していなかった実情、など黒人コミュニティの経済的、社会的状況も判明するであろう。また、隣接するモアハウス大学とアトランタ大学の学長を勤めたジョン・ホープ(John Hope)や社会学教授であったW.E.B.デュ・ボイスがスペルマン大学やその学生について書いている文書やスピーチによって、リベラルな黒人男性知識人が抱いていた黒人女性観が分析できるであろう。

ケーススタディの対象となった第二の学校は、スペルマン大学とちょうど同じ時期、1888年にアトランタ郊外のディケイター市に設立された白人女子大学アグネス・スコット(Agnes Scott)である²⁴。この学校はキリスト教に基づく白人女子教育の必要性を痛感していた地元ディケイターの長老派教会員(Presbyterian Church members)とアトランタの資産家によって創設され、支援され続けた。アグネス・スコット大学は初期からかなりの資金的余裕があったのか、残存する文書も多く、その多くは写真などふんだんに使った体裁の良いものである。まず、『大学カタログ』(College Catalogue & Bulletin)には、スペルマンと同様に、設立目的、カリキュラム、費用、学生の出身地などが載っているが、教授陣の学歴や専門分野もかなり早い時期から記載されている。科学分野も含めてカリキュラムの多様性も図られ、経営者たちが職業訓練というよりも一般教養を重視した高等教育に力を注いでいたことが判明するであろう。

歴代の学長の就任演説や所信表明はカタログとは別個に学長のニューズレター(President's Newsletter)やさまざまな学長レポート(The Annual Report of the President of Agnes Scott College to the Board of Trustees, Report of the President for the Year Ended)に記載されている。さらに、学生に向けての手引き書(Agnes Scott College Student Handbook)が配布され、校則、罰則など生活面での躰けが細々と明記されている。このハンドブックは一時期、アトランタのYWCAから発行され、アグネス・スコット大学関係者のみならず、一般の白人女子をも対象に書かれていた期間があった。これらの文書からは、南部の白人社会が、白人女性に何を望んでいたのか、どのような女性を学校は育てたいのか、さらに南部社会における宗教と女性の関係、ジョージア州の白人社会における白人女性の位置づ

けなどが的確に分析できると思われる。

学校は学生のさまざまな活動を支援していたらしく、学生は早くも設立3年後の1891年には文芸月刊誌『ムネモシニアン』(*Mnemosynean*)を発行し、この雑誌はその後、他の文芸クラブ誌と合体し『オーロラ』(*Aurora*)と改名され、現在に至っている。そして、『オーロラ』(春期号)は今やジョージア州全体の学生のための創作文芸・視覚芸術を対象とした「ライターズ・フェスティバル・コンテスト」(*Writers' Festival Contest*)の特集号となっている。1916年からは、学生週刊新聞『アゴニスティック』(*Agonistic*) (1926年から『アグネス・スコット・ニュース』(*The Agnes Scott News*), 1964年からは『プロフィール』(*Profile*)と名称が変更されている)も配布されていた。卒業生全員の写真と文章からなる卒業アルバム『シルエット』(*Silhouette*)も1902年には作られている。卒業生はアトランタ市の富裕階級の男性と結婚する機会も多く、寄付金で運営されている同窓会は1921年から活動を開始し、年3回から5回、同窓会誌(*Agnes Scott Alumnae Quarterly*)を発行し、卒業生が近況報告やエッセイを投稿している。さらに、アグネス・スコット大学古文書館には、教授陣が出版した著書、同窓生が寄付した出版物、大学関係者で地元アトランタやディケーターの名士の文書など数多くの史料が残されている。

おわりに

本稿では、ポストベラム期の南部社会における教育の普及をジョージア州に焦点を合わせて分析する際の史料を検討した。具体的には、南北戦争終了後の解放民局の任務や北部からやってきた教師陣、さらに19世紀後半に創立された女子高等教育機関についての史料の有効性を見てきた。その結果、教育の目的、担い手、対象など、教育機関をめぐるあらゆる現象が、その地域の政治、経済、社会、人々の意識を反映することが分かった。

特に、ケーススタディとして取り上げる二つの女子大学に関する第一次資料に基づく研究は、南部社会の特質を明らかにするであろうことが予測できる。その理由は女子高等教育という同じ目的を掲げて、同時代に非常に近い地域に創設された女子大学ではあるが、人種、階級の面でまったく異なる学生を対象としていたために、自ずと教育方針、教育環境、学生の意識、卒業後の進路など、さまざまな違いが顕著に見られるからである。この両者を比較して、黒人女子大学と白人女子大学の相違点と類似点を残された史料から明らかにすることによって、南部社会を人種、ジェンダー、階級の視点から論じることが可能であろう。

今回の取り上げた資料には含まれていないが、19世紀後半のジム・クロー制度を推進した南部白人や19世紀末の革新主義時代の改革に関わった南部人、特に、新南部社会の民主化を促進するために活動した女性クラブや地域連盟(*Neighborhood Union*)に従事した南部白人女性・黒人女性、リンチ反対運動に立ち上がった黒人女性・白人女性、さらに、

女性参政権運動に参加した南部女性・黒人女性たちが受けた教育的背景を探ることも、教育と社会の連関を見るために適した研究手段であろう。

それには、さまざまな組織の資料や個人の伝記、文書を収集することが必要になるであろう。このように膨大な研究プロジェクトを推進する究極的な目的は、南部社会がアメリカ合衆国の他の地域とどのように異質であるのか、また同質となり得るか、南部の特異性とは何か、ということを経史的に考察することである。

- 1 教育研究の歴史については、Ellen Condliffe Lagemann, *An Elusive Science: The Troubling History of Education Research* (Chicago: University of Chicago Press, 2002) を参照。
- 2 南部女性史研究者の Catherine Clinton, *The Plantation Mistress: Women's World in the Old South* (New York: Pantheon, 1982) や Elizabeth Fox-Genovese, *Within the Plantation Household: Black and White Women of the Old South* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988) は、アメリカ女性学研究は北部女性を対象にしたものが圧倒的に多いことを指摘し、その現象を“New Englandization of Women's Studies” と称した。女性教育の分野でも、この現象は顕著である。以下のアメリカ女性の教育に関する代表的な文献にも南部女性の教育についての言及はない。Barbara Miller Solomon, *In the Company of Educated Women: A History of Women in Higher Education in America* (New Haven, Connecticut: Yale University Press, 1985); Helen Lefkowitz Horowitz, *Alma Mater: Design and Experience in Women's Colleges from Their Nineteenth-Century Beginnings to the 1930s* (Boston: Beacon Press, 1984); Kathryn Kish Sklar, *Catharine Beecher: A Study in American Domesticity* (New Haven, Connecticut: Yale University Press, 1973)。
- 3 アンティベラム期の白人南部女性の教育については、Clinton, *The Plantation Mistress* 7章; Sally G. McMillen, *Southern Women: Black and White in the Old South* (Arlington Heights, Illinois: Harlan Davidson, Inc., 1992), pp. 77-95; Christie Anne Farnham, *The Education of the Southern Belle: Higher Education and Student Socialization in the Antebellum South* (New York: New York University Press, 1994)。
- 4 1839年ジョージア州メイコンに創設されたジョージア女子大学 (Georgia Female College, 後のウェズリアン大学, Wesleyan College) は、アメリカ最初の女子大学である。アンティベラム期の南部には32の女子大学が存在していた。Rebecca S. Montgomery, *The Politics of Education in the New South: Women and Reform in Georgia, 1890-1930* (Baton Rouge: Louisiana State University, 2006), p. 23。
- 5 James D. Anderson, *The Education of Blacks in the South, 1860-1935* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988), p. 2。
- 6 “Records of the Superintendent of Education for the State of Georgia, Bureau of Refugees, Freedmen, and Abandoned Lands, 1865-1869”, National Archives Microfilm Publication, roll 1。
- 7 William J. White から Gilbert L. Eberhart への手紙, 1867年3月29日, 同上, roll 8 (M799),
- 8 同上, roll 8。
- 9 W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk: Essays and Sketches* (New York: W.W. Norton, 1999, originally published in 1904)。
- 10 W.J. Cash, *The Mind of the South* (New York: Vintage Books, 1991, originally published in 1941)。
- 11 American Missionary Association Archives; Archives of the Freedmen's Aid Society of the Methodist Episcopal Church; *Baptist Home Mission Monthly*; *American Missionary* など。
- 12 James M. McPherson, *The Struggle for Equality: Abolitionists and the Negro in the Civil War and Reconstruction* (Princeton: Princeton University Press, 1964); McPherson, *The Abolitionist Legacy: From*

- Reconstruction to the NAACP* (Princeton: Princeton University Press, 1975); Ronald E. Butchart, *Northern Schools, Southern Blacks, and Reconstruction: Freedmen's Education, 1862-1875* (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1980); Jacqueline Jones, *Soldiers of Light and Love: Northern Teachers and Georgia Blacks, 1865-1875* (Athens: University of Georgia Press, 1980); Walter J. Fraser, Jr., R. Frank Saunders, Jr. and Jon L. Wakelyn, eds., *The Web of Southern Social Relations, Women, Family, and Education* (Athens: University of Georgia Press, 1985), pp. 127-180; Joe M. Richardson, *Christian Reconstruction: The American Missionary Association and Southern Blacks, 1861-1890* (Athens: University of Georgia Press, 1986); Evelyn Brooks Higginbotham, *Righteous Discontent: The Women's Movement in the Black Church, 1880-1920* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1993).
- 13 Wayne E. Reilly, *Sarah Jane Foster: Teacher of the Freedmen: A Diary and Letters* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1990).
- 14 Du Bois, pp. 100, 25; Cash, pp. 174-175,
- 15 McPherson, Higginbotham の前掲書。
- 16 Sandra E. Small, "The Yankee Schoolmarm in Freedmen's Schools: An Analysis of Attitudes," *The Journal of Southern History*, 45-3 (August, 1979), pp. 389-391.
- 17 Dorothy Orr, *A History of Education in Georgia* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1950), pp. 260,265; Norman V. Bartley, *The Creation of Modern Georgia*, 2nd ed. (Athens: University of Georgia Press, 1990), pp. 68, 80, 157-158; Thomas V. O'Brien, *The Politics of Race and Schooling: Public Education in Georgia, 1900-1961* (New York: Lexington Books, 1999), pp.5-6; Montgomery, *The Politics of Education in the New South*, pp. 61-65.
- 18 Montgomery, *The Politics of Education in the New South*, pp. 65-66.
- 19 Amy Thompson McCandless, *The Past in the Present: Women's Higher Education in the Twentieth-Century American South* (Tuscaloosa: University of Alabama Press), p. 28.
- 20 同上, p. 91.
- 21 19世紀後半の南部社会を人種、階級、ジェンダーの視点から論じているものは数多く出版されているが、代表的なものは、C. Vann Woodward, *The Burden of Southern History* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1960); Woodward, *The Strange Career of Jim Crow*, 2nd rev. ed. (New York: Oxford University Press, 1966), 佐々木孝弘「黒人男性が白人女性をレイプするとき-アメリカ合衆国南部社会における人種、階級、ジェンダーの構築過程(1820年-1920年)」【東京大学アメリカン・スタディーズ】3(1988) pp. 75-93; 佐々木孝弘「南部社会における家父長制とジェンダー-白人女性のレイプ事件を読み解く文脈を求めて」【アメリカ史研究】20(1997) pp. 3-9; 佐々木孝弘「アメリカ合衆国南部社会におけるリンチ事件の考察-伝統コミュニティの揺らぐ家父長制とジェンダー」下村由一、南塚信吾編【マイノリティと近代史】(彩流社, 1996) pp. 197-219.
- 22 アトランタ・バプティスト女性セミナー (Atlanta Baptist Female Seminary) として発足し、正式に大学 (College) として認可が下りたのは1924年である。
- 23 Florence Matilda Read, *The Story of Spelman College* (Princeton: Princeton University Press, 1961); Albert E. Manley, *A Legacy Continues: The Manley Years at Spelman College, 1953-1976* (Lanham, Maryland: University Press of America, Inc., 1995).
- 24 1907年、ジョージア州初の大学として認可が下り、Agnes Scott College となる。

Research Note

Education in the Postbellum Georgia: Reflection of the Southern Society from Race, Gender and Class

Hisako Yanaka

This article is about a research project with a bibliographical survey on education in Georgia after the Civil War. It has been universally recognized that education reflects the effect of politics, economics, religion, race relations and women's position in society, indeed all aspects of the culture. In order to analyze the complex and unique weave of Southern society, it would be the best way to explore how education was organized in the region.

Since my research is focused on education in the postbellum Georgia from the viewpoint of race, gender and class, the records of the Freedmen's Bureau, especially of the Superintendent of Education for the State of Georgia, is the starting point. The documents of the Freedmen's Bureau microfilmed by the U.S. National Archives Records Administration provide many informative and valuable clues when I think of the difficulty and the limit scope of education for the freedmen offered by the Federal Government in the South. Many teachers were sent from the North by various missionary organizations. Their diaries and letters described vividly the situation of the South in those days from the personal points of view. Since the 1960s, many scholars have published monographs and books based on the minutes and journals issued by the missionary organizations and churches involved with education for the freedmen in the South. Therefore, education for the freedmen can be well researched using these primary and secondary sources.

Before and after the Civil War, there were few public educational institutions in the South and their educational level was far below their counterparts in the North. Even Southern whites were deprived of education because of the unfavorable policy of the state governments. The strong demand for teachers in rural Georgia as well as in the cities led to the establishment of some private female seminaries supported by Christian societies and churches in the late 19th century.

I focus on Spelman College for black girls and Agnes Scott College for white girls as case studies to show how female higher education became entwined with the social order and expectations of Southern society. The archives of both colleges preserve their school's cata-

logues, bulletins, school magazines, and letters and papers of presidents and members of board of trustees. These primary sources provide concrete information about very different educational environments white and black girls faced due to economic, social, cultural and racial norms.

My research, based on the sources and materials related to education, will clarify the distinctiveness of Southern society and its history in the United States in the Postbellum period.